様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月　 ９ 日現在

機関番号：２３３０２
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2017～2018
課題番号：１７Ｈ０６９９９

研究課題名（和文）医療機関における家族――性的指向と性自認を軸とする患者・看護師の相互行為

研究課題名（英文）Families at medical institutions: interactions between patients and nurses in terms of sexual orientation and gender identity

研究代表者
三部　倫子（Sambe, Michiko）

石川県立看護大学・看護学部・講師

研究者番号：７０６３９０１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、医療機関においてLGBTの患者と看護師との家族をめぐる相互行為上の齟齬を明らかにするのを目的とした。性の多様性を踏まえた医療体制がどれだけ整っているかを把握するため、1）看護部長を対象とした質問紙調査を実施、さらに2）質問紙調査と併せて、LGBTの患者を担当したことのある看護師へのインタビュー調査協力者リストを作成した。看護部長の解答から、医療機関では「家族」から同性パートナーが排除されがちであることや、トランスジェンダーの患者が受診を躊躇う環境となっていることがわかった。今後のインタビュー調査への協力可能な医療機関が30弱ほどあることが把握できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
アンケートの結果から、LGBTの患者を理解するための研修を望む声が9割を超えており、性の多様性を踏まえた看護や医療を提供したいと考えている医療機関が多いことがわかった。これまで、患者側のLGBTを対象とした調査研究はあれども、日本国内で医療機関を対象とした実態調査はなされていなかった。本研究の成果は、平等に医療を受ける権利を保障する医療体制を整備するための、基礎的資料となるものである。

研究成果の概要（英文）：　The aim of my research has been to clarify what kinds of conflicts about families there have been between LGBT patients and nurses at medical institutions. First, I did a questionnaire survey of nursing directors to learn to what extent the medical system was ready to deal with sexual diversities. Second, I was able to prepare a list of nurses who would be willing to be interviewed about having had LGBT patients, by enclosing a request letter. As a result of the survey, I came to understand that same-sex partners tended to not be treated as “family,” and that the atmosphere at the hospitals has made transgender patients hesitate to seek medical services. Also, I learned that about 30 medical institutions would be willing to be interviewed for my future research.

研究分野：家族社会学、ジェンダー

キーワード：LGBT　SOGI　家族　看護　医療

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

私たちは誰しも怪我や病気、あるいは加齢による心身の変化によって医療と常に接点を持ちながら暮らしている。誰と恋愛するか（性指向 Sexual Orientation）、どのような性別を生きるか（性自認 Gender Identity）は私たちの人生を大きく左右するし、家族や性別はその人の病いの経験に大きな影響を及ぼす。その人のパートナーが同性であったり、生まれた時の性別と自認する性別が異なるという理由によって、適切な医療が受けられないとすれば、平等な医療が提供されていないという社会の側の問題となる。

私たち自身や私たちの家族にとって、もっとも身近な医療職となるのが看護師である。看護師がケアの対象とする家族は、必ずしも狭い範囲に限らない（鈴木・渡辺 2012）。実際、厚生労働省の通達などにおいても、患者の家族を狭い意味での親族に限らず「家族等」として緩く捉えるべきとしている（厚生労働省 2018）。しかしながら、患者の意識レベルが低くなればなるほど、患者の家族の範囲を親族、すなわち血族・姻族に狭める傾向にあると先行研究では指摘されている（影山・浅野 2015a；2015b）。このような医療現場における親族中心の傾向は、結婚制度を利用できない同性カップルや血縁・法的関係のない親と子を、ケアの対象から排除することにつながってしまう。

SOGI（Sexual Orientation と Gender Identity をとって「性の多様性」を表す、ソジと読む）と医療に関する先行研究は、LGBT が他の集団よりも健康を害するリスクを抱えやすい状況に警笛を鳴らしている（Eliason and Chinn 2018）。日本国内においても、LGBT である患者の立場を重視した研究や提言では、医療従事者の多様な性への無理解・知識不足による不適切、差別的な行為が指摘されている（はた・藤井 2016）。性の多様性への認識が少しずつ広がる一方で、患者側と医療側の間で適切なケアが受けられるか・提供できるのか、不安や齟齬があると予測された。

２．研究の目的

以上の背景を踏まえ本研究は、日本の医療機関において SOGI が典型的ではないとみられる患者（以下いわゆる LGBT）と看護師との家族をめぐる相互行為上の齟齬を明らかにするのを目的とした。

３．研究の方法

研究目的を達成するため、以下の調査を企画した。

1）SOGI に配慮した看護・医療の実態把握

SOGI に特化していない一般の医療機関を対象に、LGBT とみられる人々への看護・医療の有無や、かれらの困難解決のために行われている・ない実践を把握する。トランスジェンダーの患者を診ることができる所謂「ジェンダークリニック」に限定しなかったのは、ホルモン療法や「性同一性障害」の診断の有無にかかわらず、多様な SOGI を生きる人々が身近な病院で医療サービスを受けられるかどうかを把握することを、本調査の目的としたためである。

2）看護師等が医療機関で捉える LGBT の家族

LGBT とみられる患者を担当したことがある看護師が、何を根拠に、誰を家族としてみなした／なかったのか、何が家族として扱うことを戸惑わせたのかを分析する。法的根拠がないなか、医療現場の裁量や文脈に依存した「家族」像があると想像された。担当者の主観性を重視するため、インタビューを計画した。

上記調査と平行し、日本国内で LGBT や性の多様性に関して取り組む団体の研究会、勉強会などに積極的に参加し、ネットワーキングに勤めた。

４．研究成果

４．１　病院における LGBT の患者への対応について

助成期間中に、1）の調査を「病院における LGBT の患者への対応」として、東京、石川県、静岡県内の病院に勤務する看護部長を対象とした質問紙の郵送調査で実施した。日本では都市部とそれ以外とで LGBT のカミングアウトに差があると指摘されている（日高 2016）。地域差を考慮するために、この 3 都県の病院を選定した。郵送数は 914 通、二度の督促状を出し、回収率は 27.6%（有効回収率 252 票）だった。封入・発送を共栄印刷株式会社、データ入力作業を中央調査社に依託し、SPSS statistics 25 を統計解析に用いた。

郵送の際、2）のインタビュー調査のために、LGBT の患者を担当したことのある看護師への調査協力依頼もおこない、協力機関のリストを作成した（新型コロナウィルスの感染拡大のため、調査開始は保留している）。

調査に先立ち、石川県立看護大学倫理委員会から調査倫理に関する承認（2019 年 1 月 7 日看大第 658 号）を得た。

看護部長へのアンケート調査の単純集計の結果から、「家族」が明確に定義されないなか、多くの病院で同性カップルが「家族等」として扱われていないことがわかった。

「患者さんの家族の範囲を文章で明文化」しているかどうか聞いたところ、「いいえ」を選んだ回答が 8 割を超えた。つまり、病院として見解が統一されないなかで、職員が自らの裁量で判断し、行動していることがうかがえた。

成人患者に判断能力がない場合の手術の同意を誰からとっているのか、看取りの場面に誰が立ち会えるのか、ICU など面会制限のある病棟で面会が可能な人の範囲を複数から選んでもらった。選択肢として、「1 配偶者」「2 親」「3 子」「4 上記以外の親族（血族・姻族）」「5 配偶者に相当する内縁の異性パートナー」「6 配偶者に相当する内縁の同性パートナー」「7 担当医師に任せているのでわからない」「8 病棟師長に任せているのでわからない」「9 その他（自由記述欄）」を用意した。これら回答を以下のようにリコードした。

「親族のみ」：
　「1 配偶者」、「2 親」、「3 子」、「4 上記以外の親族」のどれかを回答
「異性愛のみ」：
　上記に加えて「5 配偶者に相当する内縁の異性パートナー」にも回答
「異性愛に限らない」：
　上記 2 つに加えて「6 配偶者に相当する内縁の同性パートナー」にも回答

結果として、現場の裁量によって、手術の代諾、看取りの立ち会い、ICU などでの面会が

親族に制限され、具体的には患者の手術の代諾ができる人を「親族のみ」とする回答は回答者の 4 割をこえ、看取りに立ち会える人は「親族のみ」とする回答（2 割）と大きな差があった。

生まれたときに与えられた性別と、自分がしっくりとくる性別が異なる人がいる。そうした人たちの生きづらさの大半は、周囲から本人の望む性別で扱われることで解消するといわれている。時にトランスジェンダーと呼ばれるこうした人びとは、ホルモン療法による身体的特徴の変化や服装などにより、外見の性別と戸籍などの公的な書類上の性別が異なることがある。医療機関においては患者の性自認という患者のプライバシーに配慮した対応が求められている。しかし、性別違和のある患者（トランスジェンダー）が受診しやすい環境にはなっていなかった。

外来での呼出において「フルネームで呼び出す」を選択した、つまり呼出時に特に配慮のない病院が 47.2%にのぼった。調査では、患者が「戸籍や住民票上の名前ではない通称名を使用」できるかどうかを、「戸籍名は『佐藤花子』だが、実生活では『佐藤太郎』の通称名で男性として生活している患者さんが、病院で『佐藤太郎さん』として扱ってもらえる」の例をあげて、「はい」「いいえ」で回答をしてもらった。その結果、「はい」の回答は 43.7%、「いいえ」の回答は 46.4%であった。

このように呼び出し時の配慮がなされていなかったり、性自認にあった通称名の使用が難しい実態が明らかとなった。

ほとんどの病院で、性の多様性や LGBT の理解を深めるための研修がされておらず、他方で、研修を求める声が多くあった。尚、これらの研究成果および質問紙は研究代表者の reserchmap の「資料公開」に報告書として公開した。

4.2　国内における取り組み

医療従事者や福祉関係者向けに 2018 年より毎年有志が開催している「LGBT 医療福祉フォーラム」や、市民団体が企画した「LGBT 医療改善セミナー」に情報収集と関係者とのネットワーキングのために参加し、貴重な事例や取り組みを知る機会を得た。他方、医療系・看護系の大きな学会では LGBT や性の多様性に関する報告や論文の数が少なく、未だ課題としては認知されていないと推察された。

【引用文献】

Eliason, M. J. and Chinn P.L. 2018, *LGBTQ Cultures: What Health Care Professionals Need to Know about Sexual and Gender Diversity: 3rd edition*, Wolters Kluwer; Philadelphia.

日高康晴 2016「LGBT 当事者の意識調査――いじめ問題と職場環境等の課題」http://www.health-issue.jp/reach_online2016_report.pdf　2020/07/02 確認

影山葉子・浅野みどり、2015a、「家族への退院支援に関する国内文献レビュー（第 1 報――退院における家族への意思決定支援に焦点を当てて」『家族看護研究』20(2):93-105.

――――、2015b、「家族への退院支援に関する国内文献レビュー（第 2 報）――退院調整看護師に関するこれまでの研究と家族への退院支援に関する今後の研究課題」『家族看護学研究』20（2）：106-116.

厚生労働省 2018「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン」解説編 2020/06/30 アクセス確認

https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-10802000-Iseikyoku-Shidouka/0000197702.pdf
鈴木和子、渡辺裕子、2012、『家族看護学――理論と実践［第 4 版］』日本看護協会出版会.
はたちさこ・藤井ひろみ、2016、『LGBT サポートブック』保育社.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 三部倫子
２．発表標題 LGBTから家族への問いかけ
３．学会等名 本看護科学学会第39回大会合同シンポジウムⅡ（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 影山葉子、三部倫子
２．発表標題 「LGBTの家族」への家族看護の"これまで"と"これから"
３．学会等名 日本看護科学学会第39回大会交流集会31
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

三部倫子2019年8月、「LGBTの患者対応についての看護部長アンケート」結果（簡易報告書）、単著、2019、科学研究費補助金「医療機関における家族―性的指向と性自認を軸とする患者・看護師の相互行為」、研究活動スタート支援、2017年・2018年度

三部倫子2019年12月、「LGBTの患者対応についての看護部長アンケート」報告書、単著、科学研究費補助金「医療機関における家族―性的指向と性自認を軸とする患者・看護師の相互行為」、研究活動スタート支援、2017年・2018年度

【社会への還元】
三部倫子、取材協力、2019年9月、「性的少数者医療対応進まず」『毎日新聞』2019年9月4日（藤沢美由紀記者）.
三部倫子、取材協力、2020年5月、「医療機関受診　心に負担」『北海道新聞』2020年5月11日、（根岸寛子記者）.
三部倫子、取材協力、「LGBTと医療（５）様々な背景　思いはせて」『読売新聞』2020年5月27日、（李英宜記者）.
三部倫子、オンラインイベント登壇、2020年5月「医療・救急―大切な人と一緒にいられるように―新型コロナウィルスアンケート報告会」一般社団法人Marriage For All Japan結婚の自由をすべての人に主催.

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	影山　葉子 (Kageyama Yoko)	浜松医科大学・医学部・准教授	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	筒井　晴香 (Tsutsui Haruka)	東京大学・医学系研究科医療倫理学分野・特任研究員	
研究協力者	平山　亮 (Hirayama Ryo)	大阪市立大学・大学院文学研究科人間行動学専攻・准教授	